

# 鎌倉時代に於ける表白付説教書の文章構成と文体

山本真吾

## 一、はじめに

かつて国語史研究の谷間と言われた鎌倉時代語の研究も着実に深まりを見せ、今日ではその全体像への接近も試みられるに至つてい<sup>1</sup>る。今後とも、個々の文献の記述的研究や鎌倉時代になつて顕著な一現象を取上げての考究といつた基礎的研究の積み重ねの中で、その全体像・体系の解明に努めなければならぬと思う。

この鎌倉時代の言語体系が見えにくいものとなつてゐる最大の原因は、夙に築島裕博士の御指摘になつた如く、前代の平安時代に比して表現内容の多種多様の文献が大量に出現し、複雑な様相を呈していることに存する。旧来の和歌、物語、公卿日記、往来物、漢籍・仏典の訓点資料などに加えて、説話や軍記物の類、法語、聞書、その他古経藏に伝存する漢文体や片仮名交り文で書かれた法会の記録資料等枚挙に遑ないのであつて、未だ殆ど手つかずの文献群も少なくない。

小稿で取上げる「表白付説教書」と呼称する文献群もその一つである。

文法や音韻に比して進展の遅れていた語彙の研究に於いて、身心

語彙・性向語彙など特定の意味分野に限定してその部分体系を解明するところから始めることにより、個別の語史研究から脱し一画期を成し得たように、鎌倉時代語研究に於いても個々の文献を内容の上から範疇化し、それぞれの言語の類型的性格を把握する試みが行われて然るべきであると考え。

勿論、語彙研究に於いて、特定意味分野の部分体系を積み重ねるだけではその全体系に迫り得ないというのと同じく、かような文献群毎の検討を積み重ねるだけでは限界があると言わなければならぬ。しかしながら、従来の鎌倉時代語の研究にあつては、説話や軍記物以外ではかかる試み<sup>2</sup>自体が、少なくとも自覚的にはあまり行われていなかったように思われるのであつて、一つの方向として提示することには意味があることと思うのである。

## 二、鎌倉時代の表白付説教書について

ここで取上げようとする「表白付説教書」なる文献群は、従来「唱導書」・「唱導文学」・「唱導文芸」の如く「唱導」の名を冠する文献の一として扱われてきたものである。

梁の慧皎の撰になる「高僧伝」巻第十三には、「唱導」の意義と縁由及びその技術に至るまでを縷説しているが、その一部を抄出する

と次の如くである。

○唱導者。蓋以宣唱法理。開導衆心也。昔仏法初伝。于時齋集止宣唱仏名依文致礼。至中宵疲極。事資啓悟。乃別請宿徳昇座說法。或雜序因縁。或傍引譬喩。其後廬山釈慧遠。道業貞華風才秀發。每至齋集。輒自昇高座。躬為導首。先明三世因果。却弃一齋大意。後代伝授遂成永則。

この一節を引いて、本来の中国に於ける「唱導」の意味を押え、この延長に我が国の「唱導」の流れを把握しようとする考え方が一般のようである。しかし、今日の研究者の認める「唱導書」なる文献群は、実際にはかような限定的な意味ではなく法会関係の記録といった程度の意味であり、ともすればその外延は曖昧に陥りやすいものとなっている。従来、「唱導書」などと呼称されて来た文献群を、今、試みに分類すると次の六類となろうか。

(例)

甲、表白文のみを類聚……十二卷本表白集・醍醐寺本澄意  
表白集  
乙、願文・嘆徳・教化等を含む……高山寺本表白集・続群  
書類従本表白集

- (2) 願文集……………江都督納言願文集・彰考館藏願文集
- (3) 表白・願文類要文集……………言泉集・類句抄・啓白諸句集
- (4) 表白付説教書……………草案集・諸事表白・醍醐寺本薬師
- (5) 説教書(含説話)……………法華百座聞書抄
- (6) 仏教説話……………打聞集・発心集・観音利益集

後の番号の文献群ほど、駢文的性格が稀薄となるようであつて仮名交り文の文献が多くなる。この他、仏教讃歌たる訓伽陀・声明・

和讃や、軍記物の平家物語などをこれに含める考え方もある。

このように、小稿の筆者も「唱導」の術語に曖昧である感を払拭し得ないので、この語の使用を停止することとし、「法会」という場の存在を重視し、この場に関わつて成立した記録文献を一括りにすべきものと考ええる。

鎌倉時代の法会に於ける説法では、表白は殊に重要な要素であつた。信承法印撰「法則集」に、

一 凡説法者總三段也。表白。正釈。施主段也。

とある如きである。この表白を含む文献には、(1)・(3)・(4)の如き文献群が存するが、(4)表白付説教書は、表白の他に説教・説話の類が一書に収められているものである。一書として伝存しながら、その用途や内容上、等質でない個々の文章が、これに対応して文体上の差異をも生じさせていると見られる。

小稿の目的は、この(4)表白付説教書の文献が、どのような内容の文章を有しそれらが如何なる配列形態をとっているかを明確にし(文章構成)、この内容上の差異に対応する文体差を把握しようとするにある。

三、表白付説教書の文章構成

(1) 資料の選定

表白文を有する説教書には、山口光円氏藏「草案集」、日光輪王寺藏「諸事表白」、醍醐寺本「薬師」、金沢文庫本「仏教説話集」、東京大学国語研究室藏「澄憲作文集」、三三院円融院藏「拾珠抄」など多くを挙げる事ができるが、鎌倉時代の書写と認められ複製本などで本文の得られた文献を中心に据えることとし、以下の如く、基本文献

として「草案集」（建保四年写）を選定した。そして、これによって得られた文体的特徴について、それが唯この文献のみにあてはまるのではなく、広くこの種の文献に共通して認められることを証すべく、醍醐寺本「薬師」二本（鎌倉初期写）、金沢文庫本「仏教説話集」（保延六年写）を補助資料として取上げることとした。

(2) 「草案集」の文章構成

山口光円氏蔵「草案集」一帖は、奥書に「建保四年正月廿四日西時許寫了／取筆明尊之」とある如く、建保四年（一二一六年）の書写本であつて、誤字などから見て原本ではないが、字体等からすれば成立間もない頃のものであらうと考えられる。書写者明尊については不詳であるが、所収表白に「天台大師供表白」・「楞嚴講表白」の如き天台系のものが認められ、又、文中に「澄憲法印言説ナリ」という記述の見えることから、天台宗の、殊に安居院流の法会談義に関する記録ではないかと見られている。

仏教史学・説話文学の方面から夙く研究が着手されたが、国語学の方面からも、

(1) 山田忠雄「草案集解説」（貴重古典籍刊行会複製本所収、昭33）の高論があり、注目すべき語法について重要な指摘がある。又、

(2) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」（広島大学文学部紀要、特輯号三、昭46・3）

は、鎌倉時代初期の言語を記述する上での片仮名文資料として、主にその口頭語的側面に注目しながら引用していられる。そして、近時、

(3) 田中雅和「草案集」の附属語について」（鹿兒島短大研究紀要）

31、昭58・3）

(二) 同「草案集」の用字に関する一考察—副詞による検討—（「鎌倉時代語研究」第六輯、昭58・5）

(三) 同「草案集」の用語、仮名書き自立語の意味するもの」（「鹿兒島短大研究紀要」33、昭59・3）

(四) 同「草案集」における「方」字について」（「鎌倉時代語研究」第八輯、昭60・5）

(五) 「草案集」における漢字の表記について、表白部と説話部との差異」（「鹿兒島短大研究紀要」39、昭62・3）

の一連の御研究がある。中でも、(1)・(2)・(3)・(4)は、本文献を内容上、〈表白部〉と〈説話部〉に二分され、漢字の用法を詳しく検討し、〈表白部〉に漢文訓読的用法が、〈説話部〉に和文的用法が頻用されるといふ注目すべき指摘がなされている。本稿では、さらに、当時の法会の実際を踏まえて文章構成についての私見を提出し、多角的分析を通して文体差の析出に努めたい。

「草案集」の本文は、三丁表の「草案」と内題した所より入る。

今、本文中に改行して示してある小見出しに従つて、(1)論文七二頁に設定する目次を掲げれば次の如くである。

(1) 法則・表白の草案 三丁表一行目〜五丁裏三行目

(2) 阿弥陀供養法表白 五丁裏六行目〜七丁裏五行目

(3) 大師供表白 七丁裏六行目〜九丁表六行目

(4) 同（大師供）表白 九丁表七行目〜十丁裏二行目

(5) 楞嚴講表白 十丁裏三行目〜十一丁裏七行目

(6) 第五卷（法華經五卷） 十一丁裏八行目〜十七丁裏二行目

(7) 第八卷（法華經八卷） 十七丁裏三行目〜二十七丁裏二行目

(8) 三身釈 二十七丁裏三行目〜三十二丁表四行目

(9) 経論よりの抄録 三十二丁表六行目〜三十二丁裏六行目

田中氏は、右の(1)〜(5)を表白部、(6)〜(9)を説話部と規定された。

このうち、明確に「表白」の題目を有する(2)〜(5)は、従来通り表白部と認めて差支えなからうと思う。冒頭・末尾の表現形式に注目してみると、(2)冒頭「謹敬白」・末尾「具旨本尊定知見覽」、(3)冒頭「謹敬白」・末尾「大師知見無疑矣」、(4)冒頭「敬恭白」・末尾「旨趣不具大師垂知見給覽」、(5)冒頭「謹敬白」・末尾「旨趣不具大概在之仰願仏陀垂證明大師加知見」の如く互いに酷似している。これは、峰岸明博士の解明された表白文の冒頭・末尾の表現形式の類型に適用ものである。

当時の法会のあり方を考える文献は多く存し、又、宗派・門流によつて、さらに法会の種別によつて異なるであろうが、かかる表白付説教書の文章構成を考える上で有効と思われるものに先掲の信承撰「法則集」がある。これに拠れば、表白の冒頭には、

○一 ツツシミウヤマテ  
が、そして末尾には、

○次可云御願旨如此。三宝悉知證明給。若願文アラハ可云委旨被載御願文。

が置かれるとあり、(2)〜(5)もこれに概ね合致している。そして、かかる冒頭・末尾の表現形式に注目すれば、(1)「草案」の中、三丁表二行目「敬畏白」から四丁表二行目「委載願文」までの部分を表白部とすべきことが見えてくるのである。

次に、「それ以外の部分」(従来の説話部)について検討する。

【法則集】では、先述の如く説法の三大要素として「表白」・「正釈」・「施主段」を挙げている。そして、この「正釈」は、

○正釈先仏。次供養。後種種善根等也。又、問答牒如也。或過去聖靈之遠忌等云々

と説明があり、説法中、対象仏・対象経の功德を解説し礼讃するところを指すと思われる。「施主段」とあるのは、

○施主段略仏経如此不云。仏経中得益旨講釈也。或亡者事悉釈。施主祈禱聊上作善願。爰略事有之

と説明され、施主(法会の主宰者)の信仰心の深甚にしてその功德利益の大なるべきことを賞賛する段を指すと理解される。ここで、従来、説話部と規定されて来た箇所を再度眺めてみるならば、

○將尺此卷可有三義(6)「第五卷」の冒頭、十一丁裏9)

○將尺當卷例順恒來○三意(7)「第八卷」の冒頭、十七丁裏4)

○三身功德常聞法門耳(8)「三身釈」の冒頭、三十七丁裏4)

の如く、經典や仏菩薩の釈義を示しており、「正釈」の内容に該当すると認められる。加えて、(1)「草案」の表白文以外の所も、

○任目録次第々加消釈 先借供養給釈迦如来付之 有惣別功德惣功德者三身四智五眼也 三身申候者法身報身應身也(四丁表4)

の如くであつてやはり「正釈」の内容であることが了解される。又、これらの文章の結末部には、

○諸檀施主飽身心之悦子孫繁嘯遠及皇(霜)之朝(6)「第五卷」十七丁裏1)

○法主施主魚水語久我福同持現當共快其上施主子孫弥繁昌(7)「第八卷」二十七丁裏1)

の如く、先の「施主段」に当ると考えられる内容を有しているものも認められる。

以上のことから、従来「説話部」と呼ばれて来た箇所は、確かに説法の方便として説話性を内包していることは疑を容れないのであるが、それはあくまで説法に利用された性質のものとして存在するのであって、今昔物語集や打聞集などに収録される説話群とは同列に扱うことができないと思うのである。従って、以下これらを「正釈部」と呼称することとし、その中に説話の引用を認めることとする。「施主段部」を今回認めなかったのは、本文献の場合、先に見たようにこれに相当する箇所はわずか一、二行に過ぎず特立するほどの言語量を有していないこと、正釈の後に続けて記されていることなどの理由による。先の「法則集」にも、施主段が「仏経中得益旨講釈也」とあり正釈の役割に通ずるところから、今、本文献の表現意図に即して考えると「正釈」と「施主段」とを分けることにはそれほど重要な意味があるとは考え難いのである。

これで「草案集」の本文は、内容上、「表白部」と「正釈部」とに二分されたことになる。この時点で、さらに、正釈部内部で、引用説話の部分とそれ以外の部分に類別しようと思う。説話の認定はかなり困難であると言わなければならないが、一応、過去の人間とその行為が叙事的に語られているものを日安に以下の類別を試みた。そして、これを「説話部」とし、それ以外の部分を「説教部」と呼称しようと思う。

(所在)

(類別)

(説話仮題)

○11ウ8〜12オ4 説教

○12オ4〜12オ9 ①説話——「阿難尊者の事」

(6)第五卷 ○12オ9〜14ウ9 説教

○14ウ9〜16オ4 ②説話——「阿私仙人の事」

○16オ4〜17ウ2 説教

○17ウ3〜18オ7 説教

○18オ7〜18ウ1 ③説話——「善賢菩薩の事」

○18ウ1〜19オ11 説教

(7)第八卷

○19オ11〜19ウ12 ④説話——「无盡意菩薩の事」

○19ウ12〜20ウ4 説教

○20ウ5〜25オ13 ⑤説話——「善犯女太子の事」

○25オ13〜26オ10 説教

○26オ10〜27オ5 ⑥説話——「須達長者の事」

○27オ5〜27ウ2 説教

右の(6)・(7)以外の正釈部、(1)草案の後半部、(8)三身釈には引用説話を認め難いので、すべて説教部となる。

以上の検討によって、「草案集」の文章構成は、冒頭(1)「草案」のみが表白部と正釈部という一連の説法の基本型を具備していると見られ、以下は、前半に表白部が連続して置かれ、種々の正釈部は、これらに後置されるという改編形態となっていると把握されよう。そして、正釈部のそれぞれは説教部と説話部とに分けられるのである。

(3)補助資料の文章構成

ここで言う補助資料とは、これ単独では言語量に乏しく明確なことを言い得ない不安の存する文献である。

醍醐寺本「葉師」甲、乙二本は、鎌倉時代初期の書写になる表白

付説教書と認むべき文献である。その文章構成は、甲本の場合「敬白〇(二〇一) 以下「委旨三寶諸天奉付處」(三ウ3) までが、その表現形式によって表白部と認められ、「凡薬師如来者」(四〇一) 以下を薬師如来及び日光月光二菩薩の利益を説く正釈部と認定できるかと思う。

そして、正釈部の中に、①ケイツマ寺の比丘の毒瘡治癒説話(八ウ3〜八ウ5)、②温州司馬の蘇生説話(九オ1〜九ウ5)が含まれ、これを説話部と認め、それ以外の箇所を説教部と認定する。

乙本も、甲本と同様、「敬白」(一〇一) 以下「姑射砌遠送千秋万歳之春<sup>卿</sup>」(一ウ6) までを表白部と認め、「今此薬師如来者」(五〇一) 以下最終行までを正釈部と認めることができる。こちらの正釈部にも、①大唐の憂(夏カ) 侯均の蘇生説話(八オ1〜八ウ3)、②温州司馬の蘇生説話(九オ4〜九ウ7) の説話部とこれ以外の説教部とを認める。

而して、『薬師』二本は、いずれも法会一回分の記録と見られ、表白部と正釈部から成りこの順に配される。

更に、補助資料としては、金沢文庫本仏教説話集を加えたい。

これの文章構成については、夙く山内洋一郎氏の明らかにされた所であるが、氏の示された、A 地獄の苦患(22ウ:18ウ1)・B 現世の無常(18ウ1:21ウ)と極楽讃嘆(6オ:7オ8)・C 十一面観音・弥陀如来の依正功德(7オ9:5ウ2)は、正釈部(説教部)に、D 法会の趣旨(5ウ3:16ウ1)は表白部に、E 説話(造寺功德・16ウ2:8ウ12、出家功德・8ウ13:10オ6、因果応報10オ7:15オ)は正釈部(説話部)に、F 施主讃嘆(15ウ:4オ)は施主段部に相当すると判ぜられる。

#### 四、文体分析の視点

文体分析のための指標は、表現内容に基く使用上の制約が少なく、各部それぞれの文章の性格を測定し得るものでなければならぬであろう。かような点を考慮して、次のような角度から、文体を測定してみることとする。

- (1) 文字・表記面からのアプローチ——漢字と片仮名の混濁度
- (2) 音声面からのアプローチ——音便形の分布
- (3) 文法面からのアプローチ——イ、文末表現の様相

ロ、助動詞の分布  
ハ、係結びの分布

- (4) 語彙面からのアプローチ——和文語・漢文訓読語の分布
- (5) 敬語表現の面からのアプローチ

やや機械的に設定した嫌が存するけれども、それぞれ文体分析の有効な視点としてかつてより多く用いられて来たものであり、まずはこれらを網羅し、その成果を踏まえて今後文献の性格に応じた視点を見出してゆきたいと考えている。

#### 五、『草案集』の文体

この項では、先の(1)〜(5)の視点により調査した結果、各部の特徴と思しき点に焦って記述することとする。

- (1) 漢字と片仮名の混濁度

『草案集』の表記体が、漢字片仮名交り文であることは周知の所である。その片仮名は漢文の訓点記入から発達して本文化したものと認められ、大部分が右に小書きされていて、送り仮名や助詞、助

動詞の類が殆どである。

しかし、まま漢字と同大の仮名書例が拾われ、この分布には著しい偏りが認められる。即ち、表白部には原則として出現せず、正釈部に限って用いられているのである。

〔表白部〕

○今信心孝子運志不染、色深於塩之江致誠不、梵光潔於白磨之鏡、  
(3左8、草案)

○依之欲頂色頂天王、悅而結輪廻之難永充、六趣常設之桎守刺繫十二流、  
軛之旋子、(6左4、阿弥陀供養法表白)

○夫是尊師聖靈尋、本極染縈若德弱重玄之雲思迹天台貫主骨埋、  
楞嚴之苔、(11左5、楞嚴講表白)

〔正釈部〕

○是々不思、<sup>ト</sup>程法界躰性无分別、草木皆ヒルノ身土石瓦思サナノ  
依止説成、中、<sup>ト</sup>アキレテソ覚候(4左12、草案)

○サハカリ仏重々、<sup>シ</sup>マシマセトモ値信此經之人向持此經之人乱、  
威儀、(12左7、第五卷)

○舟中浪上サテモ思トシコン有マホシケレ(21右9、第八卷)  
同じ「草案」の箇所でも、大字の片仮名書例は表白部には出現せず、正釈部のみ指摘できるのである。

表白部に出現する大字の仮名は、「フルナ(富樓那)」(3左6)、  
「ヒル(毗盧)」(7左2)、「サタ(薩埵)」(9左10)を見る程度であり、いずれも仏菩薩などの固有名について用いている。

(2) 音便形の分布

a、動詞の音便形の分布状況

まず、動詞の音便形と非音便形の分布状況について検討する。

本文献には、イ音便・ウ音便・促音便・撥音便の四種の音便形が認められる。

㉑イ音便―表白部0(0)例、正釈部7(0)例(説教―2例・説話―5例) \* ( )内の数字は非音便形の例数、以下同。

○サ、ヤイタマウ(23右2)

④ウ音便―表白部1(0)例、正釈部3(1)例(説教―1例・説話―2(1)例)

○カキタマフ候(19右5)、シツラウ給(26右11)

㉒促音便―表白部1(0)例、正釈部9(2)例(説教―2例・説話―7(2)例)

○替(7右5)、トヒカケツテ(29左3)

㉓撥音便―表白部0(0)例、正釈部2(0)例(説教―0例・説話―2例)

○伏マロムテ(22右9)

○形容詞の音便形の分布状況

b、形容詞の音便形の分布状況

形容詞ク・シク両活用

のイ音便・ウ音便の分布を調べてみた。

㉔イ音便―表白部0(2)例、正釈部3(17)例(説教―0(7)例・説話―3(10)例)

○悪事(23左3)

㉕ウ音便―表白部1(13)例、正釈部43(22)例(説教―10(15)例・説話―33(17)例)

○ツヨウ(24右2)、奉見苦候(27右1)

全体に非音便形の数が必ずしも多くないので、明確なことは言い得ないが、㉑・㉒・㉓・㉔などを見る限り、正釈部の説話部に音便形が

よく使用されるようである。

(3) イ、文末表現の様相

〔表白部〕

○智行徳高<sup>トモタカ</sup> 一人尊爲師<sup>ヒトタカシ</sup> 才弁名流<sup>サイベンメイリウ</sup> 兆民仰思<sup>テウミンオウシ</sup> 師<sup>シ</sup> (11左6)

〔正釈部——説教〕

○无邊之世音者是機也 (18右10)

〔正釈部——説話〕

○彼<sup>カ</sup>失<sup>シ</sup>一<sup>ヒト</sup>堂<sup>ドウ</sup>罪<sup>サイ</sup>障<sup>ショウ</sup>有<sup>アル</sup>申<sup>モウ</sup> スラウト覚候<sup>サウトサツクウ</sup> (26右12)

右のような文末文節の特徴と思しき点について記述する。

【草案集】に於いては、表白部—188、正釈部—693内、説教—463、説話—230の文末が認定された。各部の言語量は、行数にして(一行当り約三〇字)、表白部—182行、正釈部—551行(内、説教—34)、説話—207)である。

文末の文節が、敬語か否か、付属語が多くついているか否かといった観点から整理してみると次のようなことがわかった。

表白部の文末に於いて、最も高い使用率を示すのは非敬語用言一語で一文節を成す形態であつて、表白部の総文末の四九・五パーセントを占める。これは、正釈部の二九・七パーセントと比較しても一特徴として注目される。この形態の文末数九三の内、漢字表記である所を私に推読した箇所が三九存するが、少なくとも残り五四は活用語尾の表記等によつてそれと確かに認定し得るものである。逆に、表白部に於いては文末文節に敬語を含む形態が三・七パーセントと低い数値になっている。

一方、正釈部の文末にあつては、一文節中に敬語を含むものが二九・〇パーセントと、表白部の三・七パーセントを大きく上回り、

又、助詞・助動詞の類を下接する形態も多く認められる。

○大海<sup>オホウミ</sup> スカシマヒラセ候<sup>シカ</sup> (24右2)

○朝<sup>アサ</sup>兄<sup>ケイ</sup>廻<sup>マユ</sup>夕<sup>ユフ</sup>兄<sup>ケイ</sup>廻<sup>マユ</sup>ウレシ<sup>シカ</sup> トコソ覚<sup>サメ</sup>シメシ候<sup>ラメ</sup> (26左7)

正釈部の内、特に説教部に於いて顕著であるのは、文末に体言十断定の助動詞「ナリ」の文節がくるもので、九・九パーセントと表白部六・九パーセントや説話部五・二パーセントを上回る。

一口、助動詞の分布

ここでは、『草案集』に使用されるすべての助動詞を対象とし、各部相互にその使用度数を比較することによつて特徴を見出したいと思ふ。

まず、表白部では、のべ一五七の助動詞を数えたが、ここでは打消「ズ」(二七・四パーセント)・断定「ナリ」(一四・六パーセント)・推量「ム」(二〇・八パーセント)がよく使用される。

正釈部に於いては、七八六語を数え、表白部には認め難い「ケリ」・「ナリ」(伝聞)・「ケム」・「マシ」・「メリ」・「ス」(使役・尊敬)・「サス」(尊敬)・「ル」(尊敬)・「ラル」(自発・尊敬)・「マホシ」・「マジ」・「ウ」・「ラウ」の例が拾われる。

説教部と説話部との比較に於いて特徴的である点を述べると、説教部に優勢であるのは断定の「ナリ」(二四・九パーセント/説話二二・二パーセントに対して)・「ベシ」(一一・四/説話四・六)・「ゴトシ」(三・二/説話〇・五)・「メリ」(一・八/説話〇・二)の諸語である。逆に、説話部の方によく使用される助動詞は、過去の「キ」(二七・四/説教六・九)・「ケリ」(三・二/説教一・三)・完了の「ヌ」(二〇・七/説教一・九)などである。

この説教部と説話部との分布の相違は、坂詰力治氏が御指摘にな

つた法華百座聞書抄の説教部と説話部の使用状況と共通する性格であると判ぜられる。

#### 一八、係結びの分布

ここでは、強調を表す係結びの状況を見てみる。「草案集」に於いて強調を担当する係助詞は、「ゾ」・「コン」であって「ナム」の使用は認められない。

而して、表白部には、この「ゾ」・「コン」による係結びは見られず、正釈部に集中しているのである。

「ゾ」による係結びが四箇所（いずれも説話部）であるのに対して、「コン」の使用は七七箇所とはるかに多く用いられている。

結びの語に注目すると、説教部では結びの語に用言をとる場合、「コン——候コソウコト」という形式にほぼ限定されている（一〇例中九例）のに対して、説話部では「コン——有コソウアリ」（三例中二例）や

「コン——形容詞已然形」（三例）なども見られる。又、「コン」について助動詞を結びの語とする場合、説教部では「ム」（二〇例中一〇例）・「メリ」（五例）が特徴的であり、説話部では「キ」（三二例中一二例）・「ケム」（五例）などがよく使用される。加えて、説話部では、先学の指摘されるように（口論文、

○指言給コソウキヨウ 嶋シマ 即其ソノトコロ（24右10）

○大王コソウ 此両三日王城南コソウ 山莊遊給ヤマシラ（23左8）

の如き破格の用法の見られることも注意しておきたい。

#### (4)和文語・漢文訓読語の分布

築島裕博士は、和文語・漢文訓読語の内実を体系的に解明されたが、中でも「す」・「さす」と「シム」、「やうなり」と「ゴトシ」のような同義的二形対立は、今日までいわゆる和漢混濁文の文体を

測るものさしとして広く利用されている。この二形対立の中には、厳密には意味的・位相的に異なると見られるもの、又、源氏物語・慈悲伝以外の他の文献に見出される語の存在等の問題を含みいくつかの修正がなされてきている。築島博士自身もみずからこの問題について再検討をされている。

ここでは、指標として、文章内容に基く使用上の制約の小さい助動詞・助詞、接続詞、副詞の類を取上げてその分布を観察したい。

まず、「草案集」全体を通して見た場合、次の三群に分けられる。  
A、漢文訓読語のみ使用される場合

ゴトシ（表白部6例、正釈部14例）——やうなりヨウナリ、アニ（表白部0例、正釈部2例）——などナド、ネガハクハ（表白部3例、正釈部1例）——いかでイカデ、イハムヤ（表白部6例、正釈部3例）——まさにマシニ、イマダ（表白部12例、正釈部4例）——まだマダ、ヤウヤク（表白部1例、正釈部2例）——やうやうヨウヨウ、

B、漢文訓読語・和文語の双方が使用される場合

シム（表白部3例、正釈部2例）——す・さす（表白部0例、正釈部7例）、ザル・ザレ（表白部3例、正釈部2例）——ぬ・ね（表白部1例、正釈部13例）、ズシテ・形容詞ナシテ・ニシテ（表白部13例、正釈部12例）——で・形容詞ナシテ・にて（表白部0例、正釈部8例）、ユエニ・コレニヨリテ（表白部3例、正釈部16例）——されば（表白部0例、正釈部9例）、シカルニ（表白部3例、正釈部2例）——されども（表白部0例、正釈部12例）、アヘテ・不得（表白部1例、正釈部4例）——えエ、ずズ（表白部0例、正釈部2例）、ハナハダ（表白部2例、正釈部1例）——いと（表白部0例、正釈部1

## 例

C、和文語のみが使用される場合

シカウシテ<sup>シ</sup>テ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>て(表白部0例、正釈部10例)、シキリニ<sup>シ</sup>テ<sup>シ</sup>し  
ば<sup>シ</sup>ば(表白部0例、正釈部1例)、ミタリニ<sup>シ</sup>テ<sup>シ</sup>み<sup>シ</sup>だ<sup>シ</sup>りがは<sup>シ</sup>しく  
(表白部0例、正釈部1例)、スコシキ<sup>シ</sup>テ<sup>シ</sup>わ<sup>シ</sup>づ<sup>シ</sup>かに(表白部1例、  
正釈部2例)

右の三群を通して知られることを記すと、まず、A・B群の事例  
より、各部共通して漢文訓読語を多く用いており、表白付説教書の  
基調は漢文訓読語であると見做せることがある。

第二に、B・C群の事例に注目すれば、和文語が使用される場合、  
原則として表白部には認められず正釈部に偏って使用されることが  
ある。

例外的な、表白部に用いられる和文語の打消「ぬ」は、

○情思、若老共危誰為不秋夕風前燈(3左12)  
の如く(1)「草案」に見られる。

正釈部の中で、説教部の特徴としては、接続詞「されば」の使用  
であつて、九例のすべてがここに集中する。

○サレハ法身如来、ケタカク常寂光土仏遥可思隔无(31左11)  
説話部の方は、先に見た和文語が、正釈部の中でもこちらに多く  
分布している点注目される。す・さす、で・形容詞十て、えいず、  
などの語に於いて顕著である。

## (5)敬語表現

最後に、敬語表現について顕著な分布的偏りを一、二指摘して  
みたい。

まず、その第一は、丁寧語の使用に關してである。本文献の場合、  
对者尊敬の語としては「侍り」の使用はなく、専ら「候フ」が用い  
られている。その「候フ」は、表白部には出現せず(○九例のすべ  
てが正釈部に集中している事実が存する。即ち、法会の場合に於いて  
聴衆に直接働きかける「候フ」は表白部では使用されないのである。  
従来、表白部と見做されて来た(1)「草案」の後半部には、

○中々アキレテソ候(5右1)

○アラハニ勝ッ覚候(5左11)

の如く「候フ」の例が拾われるが、これらはいずれも、此の度の小  
稿の筆者の認定では正釈部に属する箇所に出現していて、これを以  
て逆に認定の妥当性の裏打ちをしてくれるものと思われる。

第二の点として、概して、表白部より正釈部の方が、敬語の種類  
は豊富であると言ふことができるのだが、さらに、このことは説話  
部の方に顕著であると言ふよう。

表白部は本自説教部に於いても用いられない語としては、「マカリ  
イツ(罷出)」、「マカリワタル(罷渡)」、「ソウス(奏)」の諸語であつ  
て、これらは説話部に限って用いられる。これは、説話部に於ける  
登場人物に対する待遇表現の表れとして理解されよう。

以上、「草案集」の文体的特徴と思しき点について縷々述べてきた。  
次項では、単にこれが一文献のみの特徴にとどまるのではなく、広  
く表白付説教書なる文献群の文体上の類型的性格として把握しうる  
ものであることを検証してみたいと思う。

## 六、補助資料による検証

この項では、先の(1)〜(5)の各観点から見た「草案集」各部の文体

的特徴について、他の表白付説教書「醍醐寺本」「薬師」二本・金沢文庫本「仏教説話集」にも共通して認められるかどうかを、順次検証してゆくこととする。

(1) 漢字と片仮名の混淆度

行の中央に記される大字の片仮名が、原則として、表白部に認められず、正釈部（施主段部）に集中する事実、他文献に於いても共通している。

〔表白部〕

○方今當此時非薬師之神力誰免百病全身命離伊王之本誓何滅灾患開  
榮花（薬師甲本・2ウ5）

○設備有受人身時而生遇正教流布之世希（仏教説話集・5ウ5）

〔正釈部〕

○カヤウノ先蹤モテ思候薬師如来造立或留繪人現壽長遠當生離三惡

道何疑有哉（薬師乙本・8ウ4）

○赤真珠コマヤカナルヒチキニハ三世、仏慈悲、尊容ヒマナクスキ間无

影現。（仏教説話集・6ウ7）

〔施主段部〕（仏教説話集のみ）

○今日大施主八十年、後サハカリナル衆境生（4オ4）

但し、「仏教説話集」の表白部の方は、

○万ナク（16オ11）、ヲホツカ〔ナシ〕（16オ12）

の二箇所に大字の仮名が拾われる。

(2) 音便形の分布

醍醐寺本「薬師」の場合、甲・乙二本ともに形容詞の音便形は見られず、二、三非音便形を見出すのみである。

動詞の音便形についても例数が少なく明確なことは言い難いが、

㊦イ音便——除（甲本・7ウ3）、東方ヲイテハ（乙本・12オ4）

㊧ウ音便——ハラフテ（甲本・6オ1）

㊨促音便——作（甲本・12オ3）、活（甲本・9オ3）、ヨテ（甲本・9ウ4）、西方アテハ（乙本・12オ2）

がその全例であり、いずれも正釈部に出現している。

金沢文庫本「仏教説話集」の場合、

㊦イ音便（すべて動詞）——碎（表白部・5ウ10）、凝（同・16オ4）、シフイテ（正釈・説教部・6オ12）、忽

（同・17ウ12）、耀（正釈・説話部・12ウ11）、カシツイテ（同・14オ5）

の如く、表白部にもイ音便の例は出現する。しかしながら、右の二例以外には認め難く、以下の例は、いずれも正釈部もしくは施主段部の例である。

㊩ウ音便（すべて形容詞）——メテタウ（説教部・5ウ1、6オ8、6オ11）、スサマシウ（同・23オ2）、ヤマシウモ（施主段部・4オ4）、衆

ウレシ（同・4オ6）

㊪促音便（すべて動詞）——〔有〕アテ（説話部・8ウ2、9オ1、9ウ4、13オ6、14ウ1）

㊫撥音便（すべて動詞）——挿（サハサハサ）（説教部・5オ11）、高ルヌ（同・20オ2）、住（同・23オ5）、ヲカム

奉レム（施主段部・3オ10）

(3) —イ文末表現の様相

まず、「薬師」について見るに、表白部に於いて非敬語用言で一文節を成す文末が多い（甲本四一・七パーセント、乙本七五・〇パーセ

ント)という点と、正釈部の説教部に於いて表白部・説話部に比して体言十断定「ナリ」の文末(甲本二二・一パーセント、乙本三七・五パーセント/表白部|甲本八・三パーセント、乙本〇パーセント/説話部|甲本一四・三パーセント、乙本六・七パーセント)が多いという二点の傾向性は看取されようかと思う。

『仏教説話集』の場合、表白部の言語量が少ない上に、文末かと思われる箇所が多くが漢字表記であるために明確なことは言い難いが、送り仮名によって文末文節の形態の判明し得るものについては、  
○希(5ウ5)、不輒(5ウ7、スル、値(5ウ8)、近付カム(5ウ8)、舞アキナリ(5ウ12)、遮サハアラ(16オ1)、有リ(16オ9)  
の如きであつて、非敬語の用言もしくはそれに助動詞を一つ加えた形態となつてゐる。

正釈・説教部については、

○女(メ)女(メ)世界(セカイ)衆生(シュウジヤウ)大依處(ダイイヂョ)ナリ五濁悪(ゴジュクアク)世大導師也(7ウ5)

○左(サ)三面忿怒相(サンペンインソウ)於業者(オノユヤク)發希有相(ハツキウソウ)勸進(コンシン)仏道相也(7ウ9)  
の如く、やはり、体言に「ナリ」のついた文末が目立つように思われる。

―口、助動詞の分布

『薬師』の助動詞の分布状況を見るに、乙本表白部に助動詞の使用を認め難いことから、ここでは、主として甲本を対象とする。

甲本の表白部に於いては、「ゴトシ」(五例)、「ズ」(二例)、断定「ナリ」・「ム」・「シム」(各一例)の使用を認めた。

正釈部には、表白部に用いられない受身「ラル」、「ベシ」、「ツ」、「リ」、「キ」の例が拾われ、中でも、過去を表す「キ」は九例中七例が説話部に集中している。

尚、乙本に「キ」(四例)・「ケリ」(一例)が用いられているが、やはり、「キ」が一例説教部に出現する外は、すべて説話部に集中している。

『仏教説話集』の方も、正釈部(施主段部)に於いては、「メリ」(五例)、「ケリ」(四例)、伝聞「ナリ」(四例)、「マシ」(二例)、「ケム」(二例)、「マホシ」(一例)が使用され、これらは表白部には出現しない。

「メリ」は、説教部に集中し、

○唯我身何有ナリ云事悲コト候メレ(20ウ2)

説話部に過去の「キ」(二六例)が多用されるのも『草案集』に通ずる性格として注目される。

○過去ニハ長者キリ(11ウ7)

―ハ、係結びの分布

『薬師』には、強調表現に係る係結びは見出されない。

『仏教説話集』の場合、強調の「ゾ」(三例)、「ゴン」(七例)による係結びは、正釈・説教部Bに集中している。

○取地(キ)大餓鬼(オウガク)中甚多(ナカニシヤク)受預者(ウケヨク)一人(ヒト)受子(ウケコ)一(ヒト)妻子(ウチノメ)分受(ウケタテ)云人(イハレ)无(ナシ)説(イハレ)傳(19ウ6)

○峰松(ミネノマツ)谷風(ヤノカゼ)ナカムル人性(ニョウジヤク)下階性事(ゲカクシヤク)憂(ウレ)有(19ウ8)

尚、本文献にも、破格の、

○卅八願(サハチハチノカネ)匠(ナラヒ)タクミ普賢(フツケン)行願(ギョウカネ)チリハメタル安養(アンヤウ)淨刹(ジヤク)ノ莊嚴(ソウエン)ノ寂(19ウ8)

の如き「ゴン」に連体形結びの例が指摘される。

(4)和文語・漢文訓読語の分布

『草案集』で指標として用いた助動詞・助詞、接続詞、副詞に関

して見る限り、「薬師」には、和文語の使用は認め難い。総じて漢文訓読語が用いられている点を確認できるのみである。

○身心如<sup>シ</sup>春<sup>ニ</sup>(甲本・表白部、2ウ1)

○無心草木<sup>キ</sup>直縁<sup>ニ</sup>如此何況<sup>ニ</sup>以信心<sup>ヲ</sup>聞有縁佛名號<sup>ヲ</sup>寧其勝利ナカラムヤ  
(甲本・正釈―説教部、6ウ5)

○病患漸<sup>シ</sup>重死候<sup>ニ</sup>(乙本・正釈―説話部、8オ3)

○死後廿四日云免牛身<sup>ヲ</sup>令蘇畢云々(乙本・正釈―説話部、8ウ2)

【仏教説話集】の場合、「ゴトシは、表白(一例)・正釈(三四例)・施主段(二例)の各部にわたって用いられるが「やうなり」は出現しない。又、「シム」も、表白(一例)・正釈(二例)・施主段(一例)を通じて使用されるが、「す」・「さす」は用いられないようである。

接続詞について、「シカルヲ」は表白部に一例、正釈部に三例認められ、対する和文語の「されども」も一例ながら正釈の説教部に認められる。同じく和文語「されば」の一例も説教部に、  
○サレハ宝積經中説<sup>タル</sup>見待者(20ウ3)  
の如く用いられる。

(5) 敬語表現

【薬師】の敬語の用法に関しては既に小林芳規博士の御論に言及がなされており、説話部に於ける表現の豊かさを指摘していられる。

【薬師】にも【仏教説話集】にも、表白部に於いては丁寧語の使用は認められず、専ら正釈部に用いられている事実が確認される。

○カヤウノ先蹤<sup>ヲ</sup>モテ思候<sup>ニ</sup>薬師如来<sup>ニ</sup>造立<sup>シ</sup>或局繪<sup>セム</sup>(薬師乙本・8ウ4)

○然<sup>ア</sup>ミタ如来<sup>ニ</sup>御坐<sup>ス</sup>極楽<sup>ニ</sup>世界<sup>ニ</sup>女界<sup>ニ</sup>閻浮<sup>ニ</sup>極<sup>ニ</sup>蓮<sup>ニ</sup>事<sup>ハ</sup>侍候<sup>ニ</sup>(仏教説話集・21オ9)

尚、「仏教説話集」の場合は、時代性を考慮すると当然の如く思われるが、「候フ」の他「侍リ」も使用せられる。  
○ナヒクヤシキヲタクミ得<sup>ル</sup>口借侍<sup>ニ</sup>(6オ10)

以上、醍醐寺本「薬師」二本・金沢文庫本「仏教説話集」の検討で以て、「草案集」に認められる各部間の文体的断層が、かかる文献群に共通する性格であることを明らかにし得たかと思う。ここで、これ迄の分析結果を表にして示せば次の如くならう。

(表) 表白付説教書各部の文体的特徴

正釈部 説話	(含)施主 説話	主段部 説話	部		視点	
			表白部	部	(1)文字・表記	(2)音声
漢字本位 小書片仮名 交り十大き 片仮名	漢字本位 小書片仮名 握し難い	漢字本位 小書片仮名 握し難い	漢字本位小 書片仮名交 り	漢字と片仮 名の混濁度	(3) 文	(1)文字・表記
音便形多用	「用例乏し く傾向性把 握し難い」	「用例乏し く傾向性把 握し難い」	非敬語用言 終止多用	音便形の 分布	(4) 法	(2)音声
種類多い 助詞・助動 詞終止多用	「体言+断 定ナリ」多 用	「体言+断 定ナリ」多 用	種類多い 「ズ」「ム」 など	文末表現の 様相	(5) 敬語	(3) 文
「ゴ」・ 「コン」使 用	種類多い 「断定ナリ」 多 用	種類多い 「断定ナリ」 多 用	強調の「ゴ」 ・「コン」 ・「ナム」 は使用され ない	助動詞の 分布	(4) 語彙	(4) 法
漢文訓読語 和文語の混 入	位 「コン」本 基調 和文語の混 入(「サレバ」 の多用)	位 「コン」本 基調 和文語の混 入(「サレバ」 の多用)	漢文訓読語 のみ使用 (和文語は 使用されな い)	係結びの 分布	(5) 敬語	(5) 敬語
種類多い	漢文訓読語 語多用	漢文訓読語 語多用	丁寧法の敬 語は使用さ れない	和文語・漢 文訓読語の 分布		

## 七、むすび——文体差の意味するところ——

以上、やや機械的に処理した嫌はあったが、此の度の分析によつて、表白付説教書各部の文体的特徴の主な点は析出することができたとように思う。

かかる表現の様相の差異は、当然、各部の表現内容・目的のそれと対応していると考えられるのであつて、法会の趣旨を本尊聖衆の宝前で表し白す表白部では、この時代の表白文に於ける片仮名交り文化を反映しつつ、しかしながら、基本的には前代からの伝統を踏まえて、漢文訓読体を基調とする。

そして、供養仏・経の功德を聴衆にわかりやすく解説する正釈部では、和文的要素を加え、かつ聴衆を意識しての文体になつてゐるのである。この正釈部の説教部に特に多用される表現の一つに、体言十断定「ナリ」止めの形式が存し、今一つに「コン候へ」あるいは「コン候」との形式が存する。

前者は、主として対象仏・対象経を解説・注釈する箇所に用いられてゐるのに対して、後者は説教師の考えを表明する所に用いられてゐる。この二つの表現形式は、『法華百座聞書抄』の説教部にもよく観察されることを春日和男博士・坂詰力治氏は指摘される。特に、後者の表現形式は、金沢文庫本「言泉集」にも、

○忠胤説法云（中略）誠<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>無間異熟造<sup>ニ</sup>堅業<sup>ニ</sup>因<sup>ニ</sup>コン候<sup>ト</sup>比<sup>テ</sup>寂山、三帖<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>（三）

とあり、加えて、書陵部本宝物集の説教部においても、「コン」による係結び二四例中一八例が「コン侍レ（十助動詞）」の形式となつてゐる。

○カナシキメヲノミコンハミナミル事ニテ侍メレ（八八二行）

法会に参列する聴衆に対して用いられる「候（侍）」に下接する助動詞の中では右の如く「メリ」が特徴的である。この「メリ」は一種の婉曲表現と認められるものであつて、説教の僧が聴衆に対して高圧的に臨むのでなく控えめな態度で接する、<sup>レ</sup>嗜みの用法<sup>ト</sup>とでも称すべきものとして解されよう。これは、同じ婉曲でも、例えば、蜻蛉日記などに認められる、

○いみじくこ、ちまさりて、ながめくらすほどに、文あり。「文、

物すれど、かへりごともなく、はしたなげにのみあめれば、つ、ましくてなん。今日もとおもへども」などぞあめる。（大系一九

七頁、中・蜘蛛のいと）

は、やはり手紙の中味が具体的に引用してある所より、事実として認定可能な事態であつたと思われるが、作者の無関心を装う<sup>レ</sup>とぼけの用法<sup>ト</sup>とでも称すべき事例であつて、説教師の「メリ」が聞き配慮の心理であると認められるのに対して、こちらは事実認定拒否の心理であると解されてその表現主体の心理の内実は異なつてゐると認められるのである。かかる平安・鎌倉時代の「メリ」を表現論的に扱えた場合、尚考える所が多いと思うのであるが、今はこれ以上述べない。

説話部に於いては、各観点から眺めて最も多彩な表現をとる箇所であるが、説教師の臨場感溢れる巧みな口吻を劈翫とさせる。

施主段部については明確なことは言い得ないが、やはり正釈部に附随するという内容上の連動性がそのまま文体的特徴の共通性にながつてゐるよう判ぜられる。

『沙石集』巻第八（二三）の「山僧」の「ナニガシノ阿闍梨」が

阿弥陀供養の際に、

○御堂導師ニ請ジ給ヘルニ、施主分ニ、「此御堂造立ノ故ニ、地獄

ニ落ちサセ給ハム事コソ淺猿ク侍レ」ト、シタリケレバ（大系三

六二頁）

とある施主段の引用が、やはり正釈部の表現形式と共通していることもここに付言しておきたい。

このように、今後は、表白付説教書各部の文体的性格が説話集や軍記物など他のジャンルの文献群とどのように関わり合うかということ、又、表白・説教の文体史の中での位置づけも重要な課題となる。

加えて、今回は、書写時期が下るという理由で取上げなかったが、中世二大唱導家の一である安居院流の書「澄憲作文集」、又、今一つの園城寺流の法会記録「拾珠抄」<sup>16</sup>、さらに、統群書類従巻第八百二十五所収の、経釈を含む「表白集」などにも範囲を拡げて考察する必要がある。これらは総じて此の度取上げた文献ほど正釈部に於ける文体的特徴が看取されず、表白部と同じく漢文体を主とする表現となっているのであつて、これを筆録者の記録態度の相違として解釈し得るか否か等が問題となる。

かように小稿に於いて未解決の問題が山積しているのであるが、すべて今後の二字に期したいと思う次第である。

注

(1) 小林芳規「鎌倉時代語研究の方法」（国語学会中四国支部第三十六回大会公開講演会於鳥取大学、平成三年十一月十日口頭発表）

(2) 築島裕「鎌倉時代の言語体系について」（『国語と国文学』51—4、昭49・4）

(3) 前田富祺「国語語彙史研究」第一部「第四章近代における国語語彙の研究（昭60・明治書院）」

(4) 近時、次の御論が公になりこの方向に通ずるものと思われ注目される。

土井光祐「明恵上人関係法談聞書類の本文の性格について」（『訓点語と訓点資料』87、平成3・9）

(5) 「唱導書」は、柳田良洪「金沢文庫本安居院流の唱導書について」（『日本仏教史学』4、昭17・8）などに、「唱導文学」は、折口信夫「唱導文学—序説として—」（改造社日本文学講座2、昭9・8）などに、「唱導文学」は、永井義憲「唱導文芸史稿」（『日本仏教文学』増選書）などに、それぞれ用いられている。

(6) 本文は、永井義憲・清水有聖編「安居院唱導集」上巻（角川書店・昭47）に拠る。尚、信承は、安居院流聖覚の弟子である（山口光円「新出「草案集」と安居院流学派」、『仏教文化研究』5、昭30・11）

(7) 注(5) 永井論文・注(6) 山口論文

岡見正雄「説経と説話—建保四年写明尊草案集中の一説話の釈文—」（『国語国文』26—8、昭32・8）

畑中栄「草案集研究—第八巻の説法とその伝承—」（『金沢大学国語国文』10、昭60・3）

(8) 峰岸明「表白の文章様式について」（『高山寺資料叢書別巻「高山寺典籍文書の研究」、昭55・東京大学出版会）

(9) 山内洋一郎「金沢文庫本仏教説話集の錯簡について」（『国語と国文学』43—7、昭42・7）

同「金沢文庫蔵」仏教説話集」の構成について」（『金澤文庫研究』18・5、昭47・5）尚、本資料については、同「中世語論考」（平成元・清文堂）にもその文体的特徴に関して重要な指摘がなされている。

(10) 坂詰力治「法華百座聞書抄における助動詞について」（小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』昭49・武蔵野書院）

(11) 築島裕「平安時代の漢文訓読語につきての研究」（昭38・東京大学出版会）

(12) 築島裕「平安時代漢文訓読語和文語の再検討」（中央大学国語国文学会、平成三年十一月三十日口頭発表）

(13) 小林芳規「醍醐寺蔵『薬師』二本について——所収説話と今昔物語集との関係を中心に——」（醍醐寺文化財研究所『研究紀要』6、昭59）

(14) 注(8) 峰岸論文

(15) 春日和男「小林芳規博士編『法華百座聞書抄総索引』に寄せて——侍り」と「候ふ」余説——」（『国文学攷』71、昭51・8）  
注(10) 坂詰論文

(16) 山崎誠「三井寺流唱導遺響——拾珠抄を逸つて——」（『国文学研究資料館紀要』16、平成2・3）

(17) 明恵上人関係法談聞書類にも同様の問題が存在するという。

土井光祐「明恵上人関係法談聞書類の一問題——明恵と喜海との言説をめぐる——」（中央大学国語国文学会、平成三年十一月三十日口頭発表）

〔附記〕 本稿は、「安居院流表白書の文章構成とその文体」（第九回鎌倉時代語研究会夏期研究集会、昭59・8）、「表白付説教書

の文章構成と文体」（第十回同研究集会、昭61・8）と題する口頭発表を基に纏めたものである。

研究方向を定めるにつき、かかる表白文体史の研究に開拓の余地の多く残されていることをお教え頂き、懇篤にお導き下さった小林芳規先生に深くお礼申し上げます。  
（平成3年12月16日）